

秋も深まってまいりました。今年は2年に一度の常任委員選挙の年となります。(早いものです。)10月には、滋賀大学で開催されたIASIL Japanの大会にて、ジョイスを主題としたシンポジウムが行われました。ジョイス協会からも多くの会員の皆様が出席されたようです。また専修大学を会場に、Dublinersの研究会が始まりました。今後2ヶ月に一度のペースで行われる予定です。Joycean Japanの締め切りも迫っております。よろしく御協力ください。今回のNewsletterは、以上のお知らせと御報告になります。投票用紙の御返送、なにとぞよろしくお願いいたします。

Topics

- ▶ 常任委員選挙のご案内
- ▶ Joycean Japan 第21号 投稿のご案内
- ▶ コラム1：第1回 Dubliners 研究会報告 (桃尾美佳)
- ▶ コラム2：IASIL-Japan 第26回大会シンポジウム報告 (田多良俊樹)

常任委員選挙のご案内

- ◆ 下記抜粋の会則に基き、来年(2010年)6月の総会では、2年任期の新・常任委員が選出されます。事務局ではその候補者を現・常任委員会に推薦いたします。推薦にあたり事務局は、全会員による選挙を行い、上位得票者若干名を選出いたします。
- ◆ 常任委員は「若干名」となっておりますが、現在9名で運営しております。次期の人数は決定しておりませんが、今回の選挙では、例年通り9名に投票をお願いいたします。
- ◆ 同封の投票用紙名簿の左欄に、9名を上限として、○をおつけください。
- ◆ 投票用紙名簿は、同封の事務局宛封筒に入れ御投函ください。(御住所・御氏名は無記載で結構です。)
- ◆ 選挙期間は、本ニューズレター到着日より11月20日(金)までとさせていただきますので、どうぞよろしく御協力ください。(11月20日消印有効)

日本ジェイムズ・ジョイス協会会則 (抜粋)

(役員)

第6条 この会に次の役員及び会計監査を置く。

会長1名 常任委員若干名 事務局長1名 会計監査2名

第7条 会長、常任委員及び会計監査は総会において選出し、事務局長は常任委員の中から会長が指名し、会計の任にあたる。

第8条 会長はこの会を代表し、常任委員会を召集し、常任委員会の運営にあたる。常任委員会はこの会の活動の立案・組織・運営・および機関誌の編集にあたる。

第9条 役員及び会計監査の任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

Joycean Japan 第21号 投稿のご案内

例年通り、査読対象論文の投稿締切は11月30日(消印有効)となっております。第21回大会で口頭発表された方々はもちろんのことながら、それ以外の会員からの投稿も受け付けております。

論文投稿規程

1. 投稿資格は、会費を納入している会員が有する。
2. 字数・書式。日本語の場合、14,000字以内(タイトル・註などを含む)。英語の場合、半角で28,000ストローク以内(タイトル・註などを含む)。双方とも、半角で2,400ストローク以内の英文サマリーを添付のこと。書式は、『MLA 英語論文の手引き』(北星堂)の最新版に基づくことを原則とする。
3. 11月末日までに、事務局に郵送すること(当日消印有効)。添付ファイルによる提出は認めない。なお、デジタル情報(フロッピーなど)を同時に提出する必要はないが、採用された論文については、後日提出が求められる。
4. 著者校正は初校のみとする。

なお、第21回大会の「シンポジウム」および「『フィネガンズ・ウェイク』ワークショップ」で発表されたみなさんの報告原稿は、原則12月31日(消印有効)を締め切りとさせていただきます。それぞれのオーガナイザーには、原稿の取り纏めをお願いいたします。(ご質問は事務局までお願いします。)

第1回 *Dubliners* 研究会報告

桃尾美佳

先頃の年次大会に於いて告知された通り、今秋 *Dubliners* 研究会が発足の運びとなった。第1回は10月24日土曜日午後3時より6時まで、専修大学サテライト・キャンパスにて開催され、13名が参加した。

第1回のテキストとしてとりあげられたのは“Araby”である。研究会の間ではテキスト精読を基盤とした討論が行われるが、読解の足場となる先行批評をできるだけ広く網羅するため、参加者は以下の手続きを踏んで議論に貢献することが求められた。

1. 散漫になりがちな議論の軌道を安定させるための準備段階として、参加者全員が先行批評の情報を提供しあい、*Dubliners*に関わる包括的な文献リスト作成を目指す。
2. 参加者は参照可能な先行批評に目配りし、研究会の場で簡単に報告する。またテキスト読解の過程に応じて、必要かつ有効な既存の解釈を報告する。可能な限り多様な既存研究を参照できるよう、各参加者の報告内容については各回の担当者が微調整を行う。

第2回以降に関しても上記2点の手続きを積み重ねてゆく予定である。回を重ねるにつれ、*Dubliners* 論展望の視野がより一層明るくなり、議論内容が深まることが期待される。かつては英語教材としても頻繁に利用され、ジョイス文学への登山口として機能してきたはずの *Dubliners* である。研究会の開催が新しい読みの可能性を開くとともに、新たな読者の裾野を開拓する役割を担うことを願う。

(今後の開催日程の詳細については事務局までお問い合わせください。)

Textualizing History and/or Historicizing Text ——IASIL-Japan第26回大会シンポジウム報告

田多良 俊樹

去る10月10日・11日の両日、滋賀大学彦根キャンパスにおいて、標記大会が開催された。2日目のプログラムの掉尾を飾ったのが、“Text and History: Joyce Revisited”と題するシンポジウムである。司会は清水重夫氏、発表者に高橋渡・山田久美子・Ellen Carol Jonesの三氏、コメンテーターには Morris Beja 氏という布陣であった。以下、各発表を——過度の簡略化とのお叱りを覚悟のうえで——概説し、若干の感想を述べてみたい。

高橋氏の“Text of *Ulysses*: Joyce’s (Re)writing of His(s)tory”は、*Ulysses* において「歴史」がいかにか被われているかを、テキストに即して分析するものであった。“Nestor”における Stephen が「日常の歴史」を「公認された歴史」に對置していることや、“Eumaeus”における Phoenix Park Murder が「史実が噂によって虚構化されるプロセス」を例示していることは、「歴史の正統性」を疑問に付す。さらに、高橋氏は、Stephen のシェイクスピア論が、*Ulysses* と歴史の関係について、「自己言及的・メタ言語的に機能していると主張した。つまり、Stephen が、シェイクスピアを伝記的に読みながらも自説を信じていないように、*Ulysses* は、伝記的＝歴史的に解釈可能だが、自らが紛れもなく「虚構」であることを、その物語構造と文体によって強調する。*Ulysses* は、その余りにも虚構的な形式において、「歴史」とは単一の言説で記述され得ないことを言明し、「正統な」歴史から排除・抑圧された複数の声を回復するテキストなのである。

山田氏の“The Fukien Mission: Irish Missionaries and Nationalism”は、“The Fukien Mission” (FW 467.3) という語句の加筆が、この布教活動と、それに対抗して中国で勃興したナショナリズムとに対するジョイスの深い関心に起因することを、実証主義的に論証するものであった。まず、「福建省への布教」に対するアイルランドのカトリックとプロテスタント両派による歴史的関与が精査された。そして、ジョイスが件の一節を執筆していた頃と同時期に、Maynooth Mission や Dublin University Fukien Mission が中国の動乱に巻き込まれた事件が盛んに報じられた点から、山田氏は、これらの報道が、ジョイスの中国ナショナリズムに対する関心を惹起し、件の加筆に繋がったと結論付けた。

Jones 氏の“Ghosts Through Absence”は、バーバ、ベンヤミン、デリダの時間概念を援用し、「過去」とは、記憶（しよう）する者によって変形され、復活させられ、神聖化され、最終的には抹消されるがゆえに、本質的には不在であると前提していた。植民地アイルランドにおけるこのタイプの「過去」を視覚化するのは、ダブリンに多く建つ記念碑（像）である。Jones 氏の目的は、ジョイスの作品中で言及される記念碑がいかなる歴史的経緯で設立されたかを提示し、その受容に纏わる政治性を吟味し、ジョイス作品においては、公共の「記憶」がいまだ現実化していない未来を投影することによって創造されている点を論証することにあつた。この作業の一端は、“The Dead”における Gabriel はウィリアム3世乗馬像を記念する王党派のパレードを模倣しているとの解釈に結実したが、残念ながら Jones 氏の発表は、全体

的な結論に至る前に時間切れとなってしまった。(1)

シンポジウムのテーマである「テキスト」と「歴史」とは、清水氏が冒頭で指摘したように、その指示対象が非常に漠然としている。そのためか、発表者は、同テーマを各々の批評的関心に引き付けて論じており、内容的には共通性よりも個別性の方が目立った。しかし、高橋氏はジョイスによる歴史の「テキスト化」を論じ、山田・Jones 両氏がジョイスのテキストの「歴史化」に取り組んだという意味で、各発表は、Beja 氏がコメントしたように、“complement to each other”であったと評価できるだろう。各発表の相互補完性も、「テキスト」と「歴史」の相互作用も、質疑応答の時間が予定通りに確保できていれば掘り下げられたらうにと悔やむのは、無い物ねだりだろうか。

註(1) Jones 氏に連絡を取ったところ、今回惜しくも披露されなかった結論部分については、すでに出版が決定している以下の2つの論文を参照してほしいとのこと。① “Ghosts through Absence.” *James Joyce and Cultural Memory*. Ed. Oona Frawley and Catherine O’Callaghan. Vol. 3 of *Memory Ireland*. 3 vols. Syracuse: Syracuse UP, forthcoming 2010. ② “Memorial Dublin.” *Joyce/Benjamin*. Ed. Enda Duffy and Maurizia Boscagli. Amsterdam: Rodopi, forthcoming 2009. 書誌情報の提供に関して、Jones 氏に感謝する。

事務局情報

住所変更をされて
この Newsletter が
転送で届いた方
は、お手数ですが
右記事務局宛にお
知らせください。
(e-mail 可)



日本ジェイムズ・ジョイス協会 事務局

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2

群馬大学教育学部

吉川信研究室内

メールアドレス: sean_jjsj_since08june(at)ybb.ne.jp

(送信の場合は(at)を@に変更してください)

ゆうちょ銀行 口座番号: 記号 10430 番号 1854541

(名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会)